

Cure to Care

第二話

與儀 達朗

【登場人物】第二話

町田 翼（32）：救急医

鈴木 舞（30）：訪問看護師

村井 正和（50）：訪問診療所院長

五十嵐 隼人（28）：訪問診療所職員

金城 恵（36）：訪問診療所職員

鈴木 健（52）：外科部長

八木 直久（50）：救命センター部長

黒田 直哉（55）：在宅患者

佐々木 ツル（85）（80）：在宅患者

岡田 三郎（80）：在宅患者

岡田 明子（50）：岡田の娘

新井（29）：町田の後輩の救急医

高井（30）：救命センター看護師

山田（29）：町田の後輩の救急医

島崎（30）：町田の後輩の救急医

青山（40）：岡田のケアマネ

救急隊員（22）：救急隊員

杉本（60）：定食屋の店主

野崎（60）：バーの店主

佐々木長蔵（85）：佐々木ツルの旦那

受付看護師（45）：伊祖療養病院看護師

若い女性（33）：黒田の死別した妻

学童期の女兒（8）：黒田の死別した娘

医師A（26）：救命救急センター研修医

看護師A（24）：救命救急センター看護師

看護師B（23）：集中治療室看護師

医師B（26）：集中治療室研修医

【あらすじ】（第二話）

街で訪問看護師をしている舞と出会った町田は、訪問診療所の連絡先を渡され、訪問診療所の村井院長の診療に同行することにした。

同行先で、身体的制限や自らの人生観を持ち、訪問診療を受けている患者たちと出会う。今まで病院で経験した治療と異なるオーダーメイドの治療を施す村井の考えや患者の村井への信頼に心が動かされていく。

「医療が患者の人生を決める世界が当たり前だったと思うけど、今度は彼らの人生で医療を決めてみない？」という舞の言葉を改めて思い出し、患者の人生にとって最善の医療を自身も提供したいと思い、訪問診療の道に進むことを考え始める町田。自身の考えを八木部長に告げるが、八木に「訪問診療医として自分だからできること」を問われた際、答えが出ず、八木からは慰留される。

そんな中、間質性肺炎を患う村井の在宅患者である岡田三郎が救急外来に搬送されてく

る。村井と患者、家族で明確な治療方針が定まっております、救急医としても円滑な診療を実施する町田。急変患者の受け入れ（蘇生）側を経験してきた自身が在宅患者と治療方針を構築し、仮に病院搬送となった場合でも後輩たち救急医の負担軽減にも繋がると思い、八木に自身の考えを伝える。八木は町田の決意を認めるのであった。

第二話 「決意」

○村井訪問診療所・玄関前（朝）

玄関前に立つ町田翼（32）。若干躊躇しながらも右手で呼び鈴を鳴らす。

玄関が開く。村井正和（50）が立っ

ている。

町田「はじめまして、診療見学に来た町田と申します」

村井「院長の村井です。話は聞いてます、よろしくね、どうぞ」

町田が軽く会釈して玄関から中に入る。

村井が玄関のドアを閉める。応接室を通り過ぎる。

○村井訪問診療所・オフィス（朝）

通り過ぎた応接室の先には、オフィス

となっている。長テーブルがありパソ

コンの前で作業している五十嵐隼人

（28）と金城恵（36）の姿がある。

村井「みなさん、今日診療同行に来てくれた

町田先生です」

町田「よろしくお願ひします」

会釈する町田。

村井「看護師さんの金城さんと救命士の五十

嵐くん、二人はうちの診療アシスタント」

二人を紹介する村井。

金城「町田先生、よろしく」

五十嵐「五十嵐です、よろしくお願ひします」

村井「町田先生はそこに座ってね」

町田に空いている椅子を指し示す村井。

町田「ありがとうございます」

やや緊張の面持ちで椅子に座る町田。村

井も自身の椅子に腰掛ける。

村井「早速だけど、はじめていきましよう。

昨日の夜の往診はゼロでした、今日の訪問

ルートだけど五十嵐くん教えてくれる？」

T「往診…患者や家族からの臨時の要請を受

けて行われる臨時の診療」

五十嵐「はい、今日は黒田さん宅からはじま

って…」

五十嵐の説明に耳を傾けている村井、金城、町田の三人。五十嵐の説明が終わる。

村井「ありがとう。今日も一日よろしく願います。」

○村井訪問診療所・倉庫（朝）

診療バッグに点滴類や吸引チューブ、カテーテルなどを詰めている金城。

町田が後ろに立って見ている。

町田「結構、持っていくの多いんですね」

金城「いろんな事情で家から出れない患者さんたちだから：：医療を提供するってなると、物品多くなるのよね。病院には及ばないけど点滴もできるのよ」

町田に薬剤の入ったボックスを見せる

金城。アドレナリンなどの緊急薬剤がそこには入っている。

町田「薬剤も結構揃ってますね」

町田の後ろから村井が声をかける。

村井「先生が救急外来で使う薬もあるんじゃない



ない？」

準備を終えた金城に視線を向ける村井。

村井「金城さんそろそろ出発する？」

金城「そうですね」

村井「町田先生、いこうか」

○村井訪問診療所・玄関（朝）

玄関のドアを開ける村井。後ろで靴を

履き替えている町田。

村井「行ってきます」

○車内・後部座席（朝）

運転している金城。後部座席に横並び

で座っている町田と村井。

村井「町田先生は、前田救命センターの救急

医だった？」

町田「そうです」

やや緊張気味で表情が硬い町田。

村井「今回の見学って誰かからの紹介？」

優しそうな表情で町田を見る。

町田「あ、訪問看護師の鈴木さんから……」

村井「ああ、鈴木さんね」

腑に落ちた表情でうなづく村井。

金城「舞ちゃんが、町田先生はいろいろある

からとか言っ……」

村井が冗談を言うような表情で町田を見る。

村井「いろいろあるの？」

町田「まあいろいろですよね」

町田は苦笑いを浮かべている。

○黒田宅・玄関前（朝）

一軒家の前に立っている町田、村井、

金城の三人。表札には黒田と書かれて

いる。インターホンを鳴らす村井。

村井「おはようございます、村井訪問診療所  
です」

黒田直哉（55）（声）「どうぞ」

玄関を開けて中へ入る三人。

○黒田宅・玄関（朝）

玄関にはやや幅の広い木製のスロープ  
が取り付けられている。奥から車椅子  
を自走して玄関に現れる黒田。

黒田「村井先生よろしくね、新人？」

やや引き締まった表情で、町田を見て  
軽く会釈する黒田。

村井「ああ、黒田さん。診療見学にきている

町田先生です」

手のひらを上に向けて町田を指し示す。

町田「町田と言います、よろしくお願いま  
す」

軽くおじきをする町田。

黒田「まあ上がって」

町田、村井、金城は靴を脱ぎ玄関を

あがる。

○黒田宅・居間（朝）

血圧計を巻いて、車椅子に座っている  
黒田の血圧測定をしている金城。座る

ことで黒田と同じ目線になる村井。

村井「黒田さん、最近調子どうですか？」

黒田「絶好調よ、おかげさまで」

村井「それはよかったです。おしっこの管の管理とかも大丈夫ですか？」

黒田「大丈夫」

立ちながら二人の話を聞いている。ふと居間に置かれている仏壇、置いてある写真が目に入る町田。写真には若い女性（33）と学童期の女兒（8）が写っている。町田の視線に気づく黒田。

黒田「気になるか？」

町田「あ、いえ、すいません……」

黒田「交通事故でな、嫁と娘亡くしたんだわ」

金城「黒田さん……」

バッグに血圧計を戻そうとしていた金城の手が止まり、心配そうな表情で黒田を見る。

黒田「大丈夫よ、金城さん」

自分の足を見る黒田。

黒田「俺は生き延びたが、下半身動かなくな  
ってな」

静かに聞いている町田。

黒田「退院してこの家戻ったけど、俺には何  
もねえんだわ。俺は俺でおしっこの感染や  
床ずれで具合は悪くなって病院行って戻っ  
ての繰り返しよ。惨めだろ？」

金城「最初は頑張って病院の外来に通うとし  
てたんだけどね、通院って大変なのよね。  
次第に足取りが遠のいて……」

黒田「そんで見かねた主治医が、紹介してく  
れたんよ」

村井の方を首で指し示す黒田。

黒田「今は村井先生が来てくれるし、仮に具  
合が悪くなっても、まずは家で治療してく  
れる。本当助かってる」

黒田「先生にだったら命預けられる」

真剣な表情の黒田。

村井が黒田の肩を叩く。

村井「それが私たちの仕事ですから。黒田さ

んお薬出しときますね、いつも通り薬剤師  
さんが届けに来てくれると思います」

黒田「ありがとな、先生」

黒田と村井のやりとりを見ている町田。

○黒田宅・玄関前（朝）

村井「お邪魔しました」

軽く頭を下げ、玄関の扉を閉めて、停

めていた車の方に歩き出す村井、金城、

町田の三人。車に乗り込む。

○車内・後部座席（朝）

後部座席に座っている村井と町田の二  
人。

村井「次の患者さんって……佐々木さんか」

金城「そうですね」

運転しながらちらっとバッグミラーで

後ろを見る金城。

町田「どんな患者さんなんですか？」

村井「病院が嫌いなおばあちゃん」

町田の方に目をやる村井。

町田「病院が嫌い？」

金城「そう」

○集合住宅A棟・正面（朝）

集合住宅の前でノートパソコンを

開いていた村井がパソコンを閉じる。

集合住宅の一階の階段を上がっていく

村井、金城。後続く町田。

○集合住宅A棟・401号室玄関前（朝）

表札の401号室の1の字が消えて、

40の二数字になっている。インター

ホンを押す村井。

村井「村井訪問診療所です、佐々木さん」

応答はない。ドアノブを捻る村井。

鍵がかかっておらず、そのままドアを

開けて入る村井。後続く金城。恐る

恐る二人に続いて町田が入る。

金城「ごめんくださいー」

居間に入っていく村井、金城、町田の  
三人。

○401号室・居間（朝）

今の流し台で前屈みになっている佐々

木ツル（85）がいる。駆け寄る金城。

金城「ツルさん、大丈夫ですか？」

佐々木「大丈夫よ、ちょっと頭が痛くてね」

村井も駆け寄る。

村井「佐々木さん、横になりましたでしょうか」

金城と一緒に脇を抱えながら、居間の

ベッドまで佐々木を移動して、枕を高

くして寝かせる。

村井「佐々木さん、血压とか測りましょう」

金城がバッグから血压計や酸素飽和度

を測る機械を取り出す。

村井「頭痛のほかに症状ありますか？」

佐々木「ないよ……」

金城「収縮期血压180です」

うなづく村井。



村井「金城さん、エコー用意しといて」

金城「わかりました」

佐々木「血压高い？」

村井「今日は少し血压が高いみたいです。そのせいですかね、念のために超音波検査もさせてください」

村井にエコー機械を手渡す金城。村井は佐々木の上着をめくり、エコーを胸にあてる。

村井「ちょっとひんやりしますよ、佐々木さん」

慣れた手つきでエコーを操作する村井。

町田「救急外来みたいですね」

村井「病院ほどではないけど、在宅でできる

検査もあるのよ」

エコーを終わり、佐々木の胸についたゼリーを拭き、続いてペンライトの光で瞳孔をチェックする。

村井「佐々木さん、血管や心臓の病気ではなさそうです」

ややほっとしたような表情で息をつく

佐々木。

村井「血圧が高いことが原因ですかね。」

町田「高血圧性脳症……」

村井が町田を横目にうなづく。

村井「佐々木さん、本来であれば血圧の管理

のために、入院して点滴などのお薬が必要

かもしれません」

ベッドに横になっている佐々木が村井

を見る。

佐々木「入院？点滴？嫌です！」

苦笑する村井。

村井「というと思ってました、金城さん」

金城「はい」

金城がバッグから湿布薬を取り出し、

村井に手渡す。

村井「佐々木さん、これは血圧を下げる湿布

ですよ。一日一回ここに貼るだけでいいで

す。頭痛は良くなると思いますよ」

佐々木が村井に渡された湿布を見るが

湿布をベッドの外に投げてしまう。

佐々木「いらんよ、薬は」

町田が何かを言いかけるが、手で制止する村井。優しい表情をしている。

村井「わかりました、佐々木さん。でも症状がきつかったら貼ったほうがいいですよ」

佐々木「……」

佐々木は起き上がり、床に落ちてある湿布を拾う。

村井が金城の方をみる。

金城「佐々木さん、お邪魔しました」

村井と金城が片付けをして、立ち上がり玄関へ向かう。腑に落ちない表情で、布団をかぶって寝ている佐々木を見る。

#### ○集合住宅A棟・外観（昼）

村井、金城、町田が停めてあった車に乗り込む。集合住宅前の花壇にシオンが植えられている。

○車内・後部座席

村井「あ、金城さんそろそろお昼ですね」

金城「そうですね、先生なんか希望ありますか？」

町田の方をみる村井。

村井「町田先生、何か希望ある？」

町田「希望ですか？」

町田が不思議そうな顔をしている。

村井「あ、昼飯だよ。ごめんね」

町田「あ、何でも大丈夫ですよ」

村井「金城さん、いつものあそこで」

金城「わかりました」

エンジンをかけ出発する車。

○車内・後部座席

金城が車を運転している。

村井「町田先生、先生ならさっきの佐々木さ

んみみたいな患者さんどうする？」

少し数秒考える町田。

町田「ルートをとって降圧薬を投与します。」

血圧のモニタリングが必要なので、動脈ライン取って集中治療室に入室も考えますかね」

村井「先生、さすが救急医って感じだね」

村井が数秒、間を置く。

村井「佐々木さんはね、昔認知症の旦那さんと二人暮らしだったんだよ、子供さんはいらっしゃらないんだけどね。」

村井「佐々木さんは持病も抱えながら、外来通院してて、旦那さんの介護もしてた」

町田「大変ですね……」

村井「ある日、状態が悪くて佐々木さんは病院に運ばれて、心不全で入院することになったんだ」

村井「佐々木さんは自宅に旦那さんも居るからって早期退院を望んで、主治医の先生も頑張ってくれて数日で退院できた」

町田「本人の希望通りになったってことですよね？」

村井「でも物事はそう綺麗にはいなくてね」

町田「……」

運転している金城がバックミラーで後部座席の町田と村井を見る。

数秒間の沈黙が流れる。

金城「佐々木さんの閉まっておいた薬を且

那さんが間違って飲んでしまったの」

村井「皮肉にも自身の退院日に旦那さんが

救急搬送されてきてね」

町田が何とも言えない表情で村井を見る。

村井「旦那さんは懸命な処置にも関わらず、残念ながら亡くなった」

金城「佐々木さん、相当自分を責めてね」

○401号室・居間（昼）

ベッドに横になり、ちょうど5年前の日付が印字された一枚の写真を見ている。二人の夫婦が笑っている。当時の佐々木長蔵（85）と佐々木ツル（8

0）

○車内・後部座席

村井「佐々木さんは、それから薬や病院とかいう言葉に過敏になってね……医療に対する拒否感が強いんだよ」

金城「ケアマネから私たちが紹介された最初の時なんて家に上がらせてもらえなかったですもんね」

町田「そうだったんですね……」

村井「町田先生、病院では患者さんに対して医学的にベストな治療が望ましいと思う。」

村井「ただ、訪問診療っていうのは彼らの生活や人生とも向き合わないといけないから、医学的にベストとは必ずしも言えない。でもそれが患者にとって大切なこともある」

町田「村井先生……」

村井「まあ難しいよね」

村井「患者の生活や人生を考えるってのも案外、医者として悪くないよ」

町田の左肩を叩く村井。

金城「先生、もう着きます」

○定食屋・玄関

定食屋の正面扉を開け、中にはいる村井、金城、町田の三人。

○定食屋・店内

空席のテーブルを見つけて、座る村井、金城、町田の三人。定食屋の店主の杉本（60）がメニュー表を持って近づいてくる。

杉本「村井先生、いつもありがとうございます」

村井をみる町田。

町田「先生の知り合いですか？」

村井「僕の患者さんの息子さん」

町田「そうなんです」

腑に落ちたようにうなづく町田。

杉本「お袋がいつも世話なあってありがとうございます

ね、先生。いつもの？」

村井「ああいつもの」



村井は杉本からメニュー表を受けとり、  
金城と町田に渡す。

○定食屋・店内

町田、村井、金城に注文した料理が提  
供されており、三人は食事をしている。

町田の食べるスピードにやや驚きの表  
情を浮かべ微笑む村井。

村井「町田先生、食べるの早いなだね」

町田「救急やっているといつ癖で……」

少し恥ずかしそうな表情を浮かべる町  
田。

金城「忙しいもんね、訪問診療だと昼は外食  
がほとんどね、先生」

村井「そうだね。町田先生の今の職場って前  
田救命センターだよね？」

町田「そうですね」

村井「救急だと八木先生のところか……」

町田「村井先生、うちの部長ご存知なんです  
か？」

右親指の付け根の縫合跡の傷を村井は  
左手で隠す。

村井「大学の同期だよ」

ちょうど電話が掛ってきてポケットか  
らスマホを村井は取り出す。画面には  
『五十嵐』と表記されている。

村井「ちよつとごめんね」

扉を開けて外に出ていく村井。

○定食屋・玄関

スマホを耳に当てる村井。

村井「もしもし、五十嵐くん」

五十嵐（声）「先生、お疲れ様です。訪問看

護から連絡あって、岡田三郎さんが熱発し  
てて、往診の依頼がありました」

村井「わかった、ここからだ二十分後くら  
いには着けるかな」

電話を切り、村井は扉を開けて店内に  
戻る。

○定食屋・店内

扉を開けて村井が入ってくる。

金城「先生、どうかしました？」

村井「三郎さんが熱出したみたいで往診依頼があつてね。行こうか」

席を立つ町田、金城、村井の三人。

村井がお金をもってレジへ進んでいく。

○定食屋・レジ

村井「杉本さん、ご馳走様でした」

村井は杉本にお金を渡す。

杉本「まいど。相変わらず忙しいね」

苦笑いを浮かべる村井。

杉本「ちょっと待ってな」

杉本が暖簾をくぐり奥の厨房に

入っていき、右手に袋を下げて

レジへ戻ってくる。

杉本「これうちのところで取れたやつ」

村井に手渡す杉本。袋の中には数個の

梨が入っている。

村井「すいません、杉本さん」

杉本「気にせんでよ、いつも世話なってるし」

袋を軽くかがげて会釈して、出口へ向

かう村井。

○岡田宅・玄関

村井が玄関のインターホンを押し、扉を開ける岡田明子（50）。

明子「先生、すいません忙しいのに」

村井「いえいえ：お父さんの様子は？」

明子「おとといから熱が出て全然下がらないんで今日訪問看護師さんにきてもらったんです」

○岡田宅・寝室

寝室に入っていく村井、金城、町田の

三人。寝室にはカラオケを歌っている

岡田三郎（80）や孫と笑っている写

真が飾られている。寝室では、岡田がややぐったりして寝ている。在宅酸素

の機器が横に置いてあり、岡田の鼻には酸素のカニューレがついている。酸素飽和度を測っている鈴木舞（30）。

明子「症状は鼻水と軽度の咳くらいだったんですが……」

舞「今日から喀痰に色がついてきているのと酸素の値がいつもより少し下がったので肺炎が心配で……」

舞の話を受けている村井。舞の話が終わり、聴診器を持ってベッドサイドに座る。

岡田「先生、すまんね」

村井「大丈夫ですよ、岡田さん。」

岡田の聴診を行っている村井。

村井「気管支炎か軽度の肺炎かもしれませんね」

寝室の扉の前に立っている町田の方を振り返る。

村井「町田先生なら、どうする？ 岡田さんは間質性肺炎を患っている」

いきなりの質問を振られて驚く町田。

町田「そうですね……飲み薬か点滴で抗生物質を使いますかね。ただ悪くなった時の治療も話し合っておくべきかと思います」

町田の回答にうなづく村井。舞も

町田の方を見る。

村井「私も町田先生の意見と同じかな」

村井「金城さん、娘さん呼んできてもらえますか？」

金城が一時外していた娘を連れてくる。

村井が岡田の方をみる。

村井「岡田さんは気管支炎か軽い肺炎だと思います。抗生物質は飲めそうですか？」

岡田「飲めるよ……」

村井「わかりました。ただ、岡田さんは間質性肺炎という肺の組織が硬くなって変形する病気をお持ちです。今回のような感染で悪くなるかもしれません。」

静かに村井の話を受けている岡田。

村井「抗生物質の治療でも悪くなったら、管

間質性肺炎が悪くなっている可能性が否定できません。その時は病院に行くのもひとつの選択肢だとは思ってます」

一旦話を止め、娘さんの方を振り返り、再度、岡田の目をみる村井。

村井「これから話す内容は、一部厳しい話もありますが、大丈夫ですか？」

うなづく岡田と明子。

○岡田宅・玄関

村井「どうもお邪魔しました」

金城「お大事になさってください」

明子「本当先生に来てもらって良かったです」

玄関先で深々と頭を下げる明子。

村井「いえいえ、また何かあったらいつでも連絡してくれたら。失礼します」

何か心を揺さぶられた表情をしている

町田。明子に軽く会釈して、村井、金

城の二人の後について行く。

○村井訪問診療所・玄関（夕）

玄関の扉を開ける村井。村井は靴を脱いでオフィスに向かう。金城と町田が続いて入っていく。

○村井訪問診療所・オフィス（夕）

金城「戻りましたー」

金城が五十嵐に声をかけながら、席に着く。作業中の手を止め、顔をあげて

村井、金城、町田の方をみる五十嵐。

五十嵐「お疲れ様でした」

村井「町田先生、今日の同行はこれで終わり

かな。どうだった？」

町田「訪問診療の現場をはじめて経験させて

もらい新鮮でした。ありがとうございます  
た」

軽く一礼して、町田は玄関に向かう。

○村井訪問診療所・玄関

玄関まで見送りに来る村井。



町田「実は最近、治療コードが決まってい  
ない患者さんたちに悩んでいて。先生み  
たいな人に診てもらえたら、彼らも幸せ  
かなと思いました、失礼します」

玄関まで見送りに来てくれた村井に  
頭を下げ、扉に手をかける町田。

後ろから村井が声をかける。

村井「治療コードね……。先生が決めるこ  
とのできる世界もあると思うよ」

村井の方を振り返る町田。村井は優  
しそうな表情を浮かべている。

町田「失礼します」

町田は再度会釈して扉を開けて外に  
出る。扉が閉まる。閉まった扉を見  
ている村井。

○町田自宅・居間（夜）

座って缶ビールを飲んでいる町田。  
散らかっていた部屋は整理されてお  
り、机の上には何も置かれていない。

○（回想はじめ）居酒屋（夜）

舞「医療が患者の人生を決める世界が当たり前だったと思うけど、今度は彼らの人生で医療を決めてみない？」

（回想終わり）

○町田自宅・居間（夜）

立ち上がり棚からサークル時代の寄せ書きの色紙を手取る町田。舞からのメッセージが目止まる。「患者さんの幸せを考えられるお医者さんになってね 鈴木舞」と書かれている。何かを決心したように前を向く町田。

○前田救命センター・外観（朝）

「前田救命センター」の看板が壁にかがげられている。

○同・医師控室（朝）

クラツカーの音が鳴り、テープが顔にかかる町田。

新井（29）「町田先輩、復帰おめでとうご

ざいまーす」

笑顔で町田と肩を組む新井。山田（2

9）と島崎（30）も手にクラツカ

ーをもって町田を笑顔で見ている。

島崎「先輩、おかえりなさい」

山田「お久しぶりです」

ちよっと恥ずかしそうな表情を浮かべ

る町田。

町田「お前ら、やりすぎ」

新井の頭を抱える町田。

町田「ちよっと俺部長に話あるから」

新井、島崎、山田に手で合図して

町田は医師控室を出ていく。

新井「えー先輩つれないな。」

島崎「町田先輩、ただの有給明けでしょ」

空のクラツカーを新井の手に握らせて

島崎も医師控室を出ていく。

山田「俺はクラツカー良かったと思うよ」

新井の肩を叩き、島崎の後を追い

医師控室を山田が出ていく。

○救命センター部長室（昼）

部屋の扉の前には「部長室」の札。

八木が椅子に座っている、目の前に

立っている町田。

八木「休暇どうだった、休めたか？」

町田「おかげさまで。ありがとうございます。申しました」

八木「休暇ってのはお前の権利だからな」

軽く笑う八木。

町田「部長、実は今後、進みたい道があって」

八木「おお、見つかったのか？」

町田「この休暇中、実は訪問診療所の同行に行ってきました。村井訪問診療所です。村

井院長は先生の同期とか」

微笑んだ八木の表情が真顔に変わる。

八木「おお村井か。なんでまた訪問診療？」

町田「大学の同期から見学を勧められて」

八木「なるほど…」

町田「患者の人生観を考えて医療を提供している院長や主治医として治療コードを決めている姿をみて、自分もそうなりたいと思いました」

机の上で手を組んで町田の話聞いて  
いる八木。

八木「良い経験をしたんだね。」

数秒ほど下を向いて考えて八木は顔を  
上げて町田を見つめる。

八木「先生の気持ちはわかったけど、訪問診療医を目指す中で、町田先生だからこそ、できることは何かあるの？」

予想してなかった八木の言葉に戸惑う  
町田。

町田「それは……」

町田の答えに窮する姿をみて八木が  
立ち上がり、町田の横に歩いてくる。

八木「今の先生の理由だったら、先生の良さは伝わってこないかな……もう少し考えてみたら？」

八木の言葉を聞いて軽く下を俯く町田。

○岡田宅・寝室（昼）

岡田のケアマネの青山（40）が寝室に入ってくる。

青山「岡田さん、大丈夫ですか？」

岡田「青山さん、酸素をあげても苦しくて」

青山が在宅酸素の機器に目をやると、通常の酸素投与量より数段階上がっている。青山が焦った表情でスマホを取り出し誰かに電話をかけはじめる。

○前田救命救急センター・ステーション（昼）

町田がスクラブのポケットに手を突っ込んで歩いてくる。駆け寄ってくる新井。

新井「先輩、ちょっと手貸してもらっていいですか？」

町田「おお、どうした？」

新井「今から呼吸不全で救急搬送されてくる

患者なんですけど……」

新井の持っている患者情報が記されているボードを手にとる。記載されている内容を見て町田の表情が変わる。

町田「岡田三郎……かかりつけなんか言っていた？」

新井「えっと、村なんとか診療所だった」

町田「村井訪問診療所？」

新井「あ、そうそう、それです！」

すぐ後ろで点滴を準備していた高井看護師（30）だが、村井訪問診療所という言葉に反応する。

○同・初療室（昼）

救急隊員（22）が岡田を運んでくる。初療室のベッドに移しかえられる岡田。看護師A（24）がモニターを装着している。医師A（26）が患者に酸素マスクの付け替えを行なっている。新井が挿管の準備をし始める。

町田「新井、それは必要ない」

新井「え？」

新井「先輩？」

町田の発言に驚いている新井。

○（回想はじめ）岡田宅・寝室（昼）

村井「これから話す内容は、一部厳しい話もありますが、大丈夫ですか？」

うなづく岡田と明子。

村井「岡田さんの間質性肺炎が一旦悪くなると、重度の酸欠状態になり命が危なくなります。命を救うためには人工呼吸器が必要な状態になるかもしれません。」

一呼吸おいて続ける村井。

村井「ただ人工呼吸器を着けたからといって岡田さんの間質性肺炎を治すことはできません。あくまで呼吸をサポートする機械なんです。」

静かに村井の話を聞いている岡田と明子。



村井「仮に人工呼吸器をつけた場合、元の正常な肺が少ない事に加え、集中治療で筋力も落ちていく岡田さんは、その先の人生を人工呼吸器無しで生きていくことができません」

明子「管に繋がられたままってことですか？」

村井「残念ながらそうです」

岡田「それは嫌だ」

明子「お父さん……」

村井「岡田さんの人生の生きがいは何んですか？」

岡田「俺はカラオケや明子や孫と話をするのが生きがいだよ。もうそれができなくなるのだったらそんなの生きてる意味がない……」

涙ぐむ明子。

岡田「村井先生、俺がもうダメそうだったら、せめて苦しさをとってくれ。頼むわ」

優しく岡田の手を取りうなづく村井。

（回想終わり）

○同・初療室

町田「新井、ハイフロー装着して、レントゲン取ろう。治療を進めていくけどもたなかつたら、岡田さんの呼吸苦をとる治療をしてあげよう」

新井が驚きつつも町田の方針を聞いている。

○同・面談室

明子が椅子に座っている。町田が扉を開けて入ってくる。立ち上がる明子。

明子「先生、父は？」

町田「幸い、人工呼吸器ではないサポートをつけて落ち着いています。しばらく入院は必要になると思いますが……」

明子「本当にありがとうございます」

明子が深々と頭を下げる。

町田「いえいえ、こういうことまで予想して治療方針を事前に話し合ってくれた村井先

生のおかげですよ」

二人のやりとりを見ている八木。

○同・初療室前

町田が面談室から歩いて初療室に戻ってくる。新井が駆け寄ってくる。

新井「先輩、なんで治療方針あんな簡単に決められたんですか、というかなんか決まっていますでした？」

町田が微笑を浮かべる。

町田「決めたのは俺じゃないよ」

町田が新井の肩を叩いて去っていく。

新井が腑に落ちない表情で町田を見る。目の前から八木が歩いてくる。

町田「部長」

声をかけられ町田の目をみる八木。

八木「どした？」

町田「俺、やっぱり訪問診療の道に進もうと思いません」

新井「訪問診療？」

横にいた新井が町田をみて驚いた表情をみせる。

町田「俺は蘇生側でいろんな患者さんを見てきました。一步間違えれば、僕らの処置で望まない人生を強いられる患者さんがいる」

町田をみて黙って聞いている八木。

町田「村井先生を見ていて思いました。急変時の患者の治療方針を事前に話し合っておくことがやはり大事だと」

町田「急変後の受け手である自分だからこそ、患者さんたちと事前に話せることは多いと思います」

八木が町田を黙って見つめている。

町田「仮に病院搬送になっても、新井たち後輩が治療方針に迷わないように俺はしてくつもりです」

八木「町田、それがお前の考えなんだな」  
しばらくお互いの目を見つめている町田と八木。

八木「新井、町田を盛大に送り出してやるぞ」

新井「町田先輩……」

新井の肩を叩き、去っていく八木。

吹っ切れた表情で八木の姿をみて軽く

頭を下げる町田。

○村井訪問診療所・オフィス（夜）

椅子に座って引き出しから一枚の写真

を取り出し見ている村井。スマホの着

信が鳴る。電話に出る村井。

○バー・カウンター（夜）

八木がノンアルコールカクテルを飲ん

でいる。隣に座る村井。

村井「呼び出すなんて珍しいじゃないか」

野崎（60）「お客さん、何になさいます

か？」

村井「同じやつで」

八木「飲まなくなったの？」

村井「ほぼ毎日オンコールなんだよ」

八木「お互い忙しいな」

野崎「どうぞ」

野崎がノンアルコールカクテルを

村井の目の前に置く。

村井「ありがとう」

村井がカクテルを一口飲む。

八木「うちの町田が世話なっただって？」

村井「いやいや、同行してくれたただだよ。」

八木「あいつ、訪問診療に進みたいんだって。

お前の診療見てなんか感じたらしい」

村井「俺の？」

軽く笑い、カクテルを飲む村井。

八木「町田のことよろしく頼むわ」

村井のほうを真剣な眼差しで見つめる

八木。八木の目を見返す村井。少し考

え込む村井。

村井「別にいいけど……あの時の俺の経験は

させたくないな」

村井の横顔を神妙に見つめる八木。

八木「15年か」

村井「そうだな……最近どう？」

八木「変わらず働いているよ」

村井「そうか……」

カウンターで喋りながらノンアルコールカクテルを飲む八木と村井。

○居酒屋・団体席（夜）

新井が涙を浮かべながら、ビールのジョッキを手にとって立ち上がる。八木、島崎、山田、医師A、看護師A、医師B（26）、看護師B（23）らが座っている。中央に座っている町田。

新井「このたび、町田先輩は新たな道に進むことになりました……」

咽び泣きはじめる新井。新井に目をやる苦笑いの町田。八木がグラスを持って立ち上がる。

八木「町田先生の新たな門出に乾杯！」

一同が乾杯をしてグラスに口をつける。盛り上がっている一同。島崎が花束、山田が寄せ書きを持ってくる。

島崎「先輩、いろいろと教えてくれてありがとうごございました。先輩の活躍を祈ります。正直寂しいです」

若干涙目の島崎。

山田「僕らが戻ってきてすぐ居なくなるなんて……もっと一緒に働きたかったです」

町田「ごめんね。でもこれからも後輩のために仕事するのは変わらないから。ありがとう」

島崎と山田から寄せ書きと花束をもらう町田。目を真っ赤にした新井が町田に抱きついてくる。

町田「新井、やめろよ」

新井「まだ間に合います、先輩嘘って言うてください」

新井を引き剥がす町田。

町田「ちよっとトイレ」

町田が暖簾をくぐって外に出ていく。

島崎「あ、そういえば高井さんは？」

山田「確かに……」

一升瓶を机の上に置く新井。



新井「高井さんは今日夜勤じゃない、でも居ない。絶対男だ……」

一升瓶のお酒を注いで飲んで咽び泣く

新井。新井の姿をみて呆れる島崎。

島崎「あんた、本当きもい……」

ノンアルコールビールを飲みながら静

かに新井と島崎のやりとりを静かに見

ている八木。

○伊祖療養病院・受付（夜）

受付の扉が開いてやや小走りで走って

くる高井。受付看護師（45）が座っ

ている。

高井「すみません、面会時間ギリギリで……」

受付看護師「高井さん、大丈夫よ」

頭を下げる高井。

○伊祖療養病院・病室（夜）

高井が病室の扉を開ける。

病室には人工呼吸器があり、軽度のり

トク音が鳴っている。高井の前にはベ  
ッドに横になっている患者がいるが、  
高井の後ろ姿で患者の姿は見えない。

（第三話に続く）